

蓮華峯寺陵の墳丘外形調査

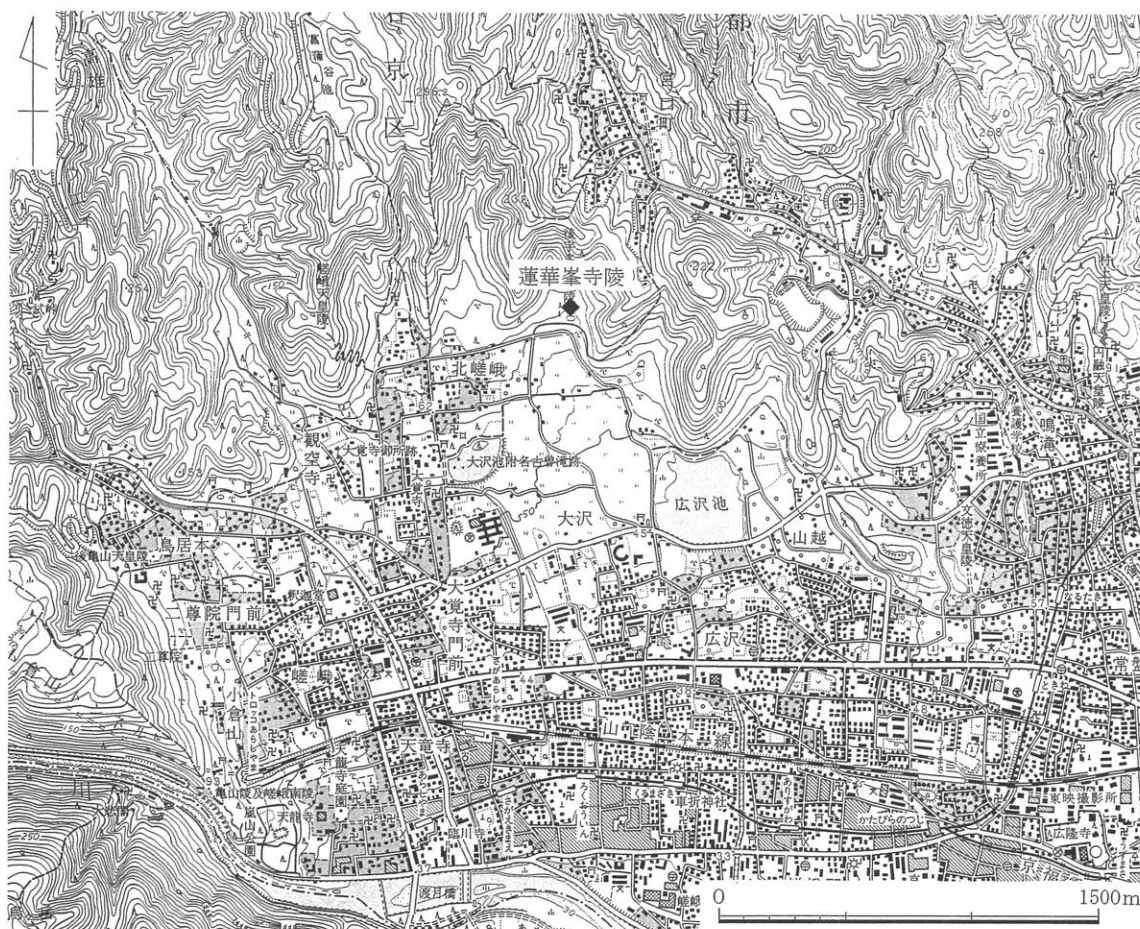
陵 墓 調 査 室

はじめに

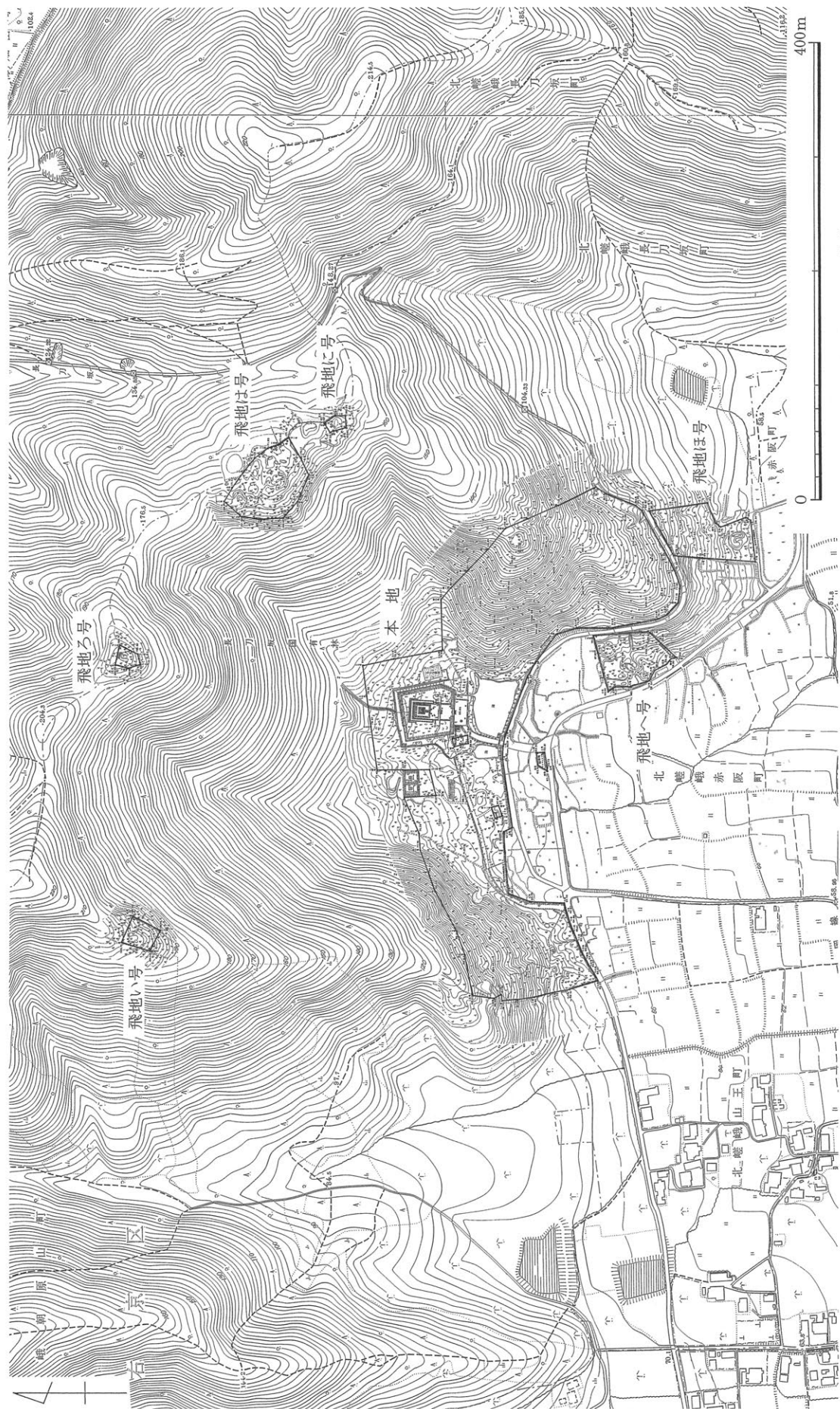
蓮華峯寺陵は後宇多天皇、母である龜山天皇皇后佞子、龜山天皇分骨、後二條天皇分骨、後宇多天皇皇后姁子内親王分骨を合葬したところである（以下、蓮華峯寺陵という）。当所は京都市の北西に位置し、朝原山の南東麓、長刀坂の西にあたる。その南東には広沢池、南西には大沢池や大覚寺がある（第1図）。

陵は、法華堂（方形堂）の四周に透塀を方形にめぐらしたものであり、南面中央は高麗門となっている。陵域は、この法華堂を中心に東西にそれぞれ約250m、翼を広げたような範囲に及んでいる。その面積は約5万㎡である。また、朝原山から東へ派生する丘陵上には西から飛地い号、ろ号、は号、に号がある。朝原山の東南麓には本地に接し、東に飛地は号、西にへ号が位置する。本地と飛地を併せた面積は約6万㎡にも及ぶ（第2図）。

当域内には、以前から古墳の存在が知られていたが、その実態は明確ではなかった。そこで、古墳の実数・外形・石室の存否等の確認のため、全域にわたる踏査を行った。現在使用している



第1図 蓮華峯寺陵 位置図 (1/30000) ※国土地理院発行 1:25000 地形図「京都西北部」(N1-53-14-6-2)より作成



第2図 蓮華峯寺陵 全体図 (1/5000) ※陵墓地形図及び京都市都市計画局発行 1:2500 都市計画図「北嵯峨」「宇多野」より作成

陵墓地形図(昭和4年測量、同5年製図、同56年修正)は縮尺1/1,000で作成されており(第3図)、細部の観察には耐えられないため、必要に応じ縮尺1/100、等高線間隔25cmで古墳の実測図を作成した。調査は平成14年(2002)3月11日～17日、翌15年3月10日～22日の2ヶ年、延べ20日間にわたった。

1. 蓮華峯寺陵域の沿革等

ここで、簡単に蓮華峯寺陵の陵域の沿革を見ておきたい。本陵は慶応元年(1865)5月5日、修補竣功が奉告されている。その時の陵域は、法華堂を取り囲む透塀の内部を中心としたところのみであった。明治13年(1880)の「山城國丹波國御陵墓兆域地坪取調明細表」(諸陵寮出張所『陵墓地録』1、明治13年所収)によれば、「後宇多天皇陵」の兆域地坪は「六百九拾五坪七合三勺」(約2,300㎡)となっている。同38年には、陵に接続する国有林五町六段余り(約55,000㎡以上)を付属地として囲い込んでいる。この地域が現在の本地の大半と、飛地い号～へ号である。この段階で、ほぼ現在の陵域となっており、今に至っている。

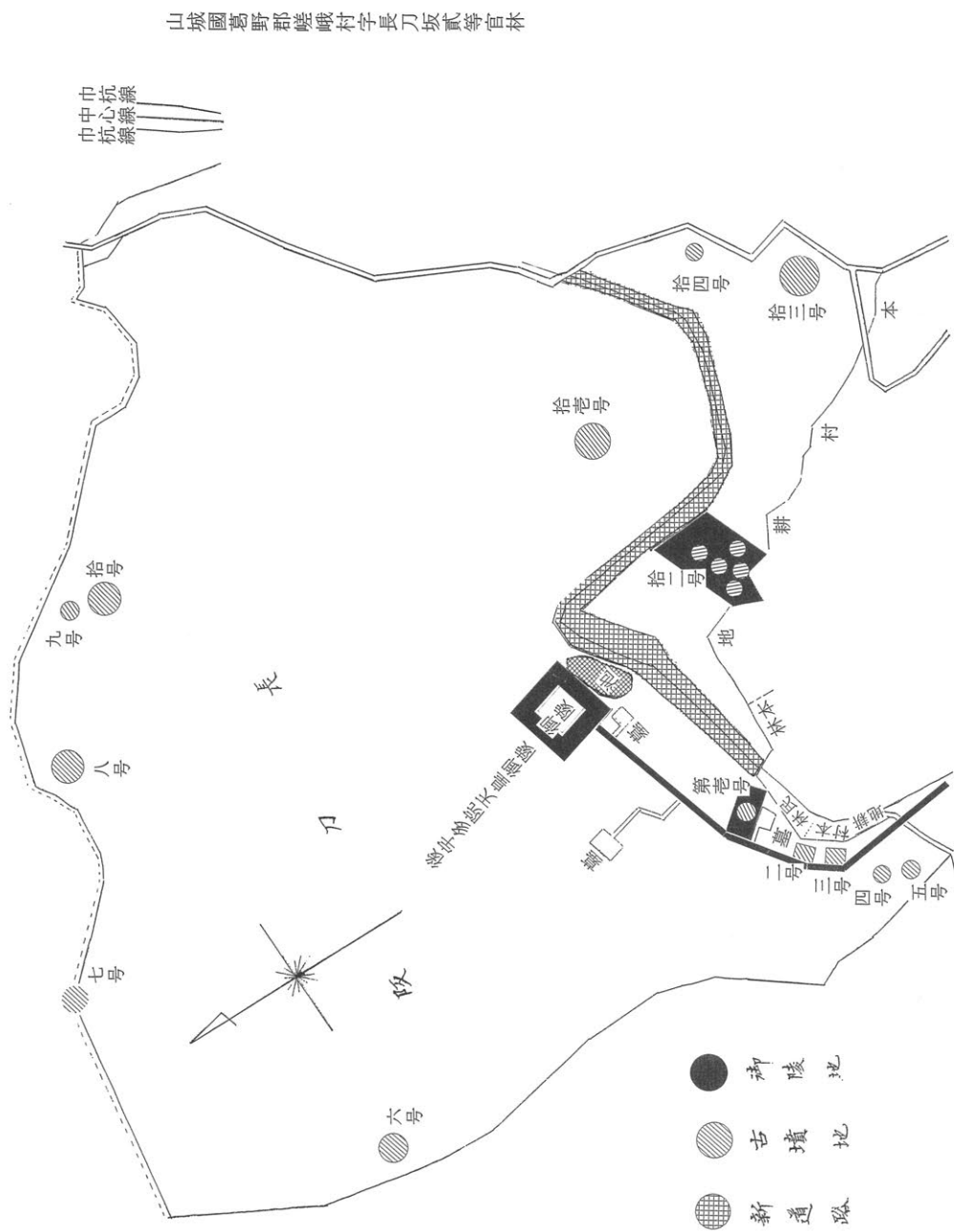
先述したように、以前から本地および各飛地内に古墳があることが知られていた。しかし、天和2年(1682)草稿、貞享3年(1686)刊の黒川道祐撰『雍州府志』、元禄15年(1702)3月に完成した釋白慧の撰した『山州名跡志』、並河永等による『日本輿地通志 山城志』(享保19年:1734)など江戸時代の地誌類には、古墳に関する記載はまったく認められない。山陵治定に大きな役割を果たした谷森善臣が、文久元年に撰した『山陵図 附、考證之書』の「蓮華峯寺御塔」の項でも古墳については言及してはいない。また、時代は下って、昭和7年(1932)発行の堀永休編輯の『嵯峨誌』にも古墳関係の記述は見えない。

当庁保管文書で、古墳の存在を確認できるもっとも古い資料は、『陵墓地録』明治38年(諸陵寮出張所)に収載されている「後宇多院天皇御陵接續ノ長刀坂國有林ノ一部ヲ御陵附屬地ニ、木幡陵接續ノ御藏山國有林ノ一部ヲ御陵兆域ニ編入之件」とそこに添えられた図面(明治38年5月以前に作成)である(第4図)。これは前述した国有林五町六段余りを取りこむ際、事前に作成されたものである。そこには、本地西側(旧第貳号)に5基(1～5号)、同東側(旧第七号)に1基(11号)、飛地い号(旧第参号)に1基(6号)、同ろ号(旧第四号)に1基(7号)、同は号(旧第五号)に1基(8号)、同に号(旧第六号)に2基(9・10号)、同ほ号(旧第九号)に2基(13・14号)、同へ号(旧第八号)に5基(12号として総称)、計18基の古墳が丸印、もしくは角印をもって表記されている。ここに描かれた古墳はすべて現存しており、一部に遺漏はあるものの、当時の関係者の古墳観察の水準をうかがい知ることができる。

ついで、当地の古墳のことを知るうえで欠かすことのできない資料は、昭和46年(1971)に発行された『嵯峨野の古墳時代』⁽¹⁾である。当陵域内には16基の古墳があるとされており、それぞれの形状や規模(径・高さ)、および現状が記載されるとともに、一部の古墳については石室の開口方向、玄室長が記されている。考古学関係者による最初の踏査記録として位置付けられよう。また、『京都市遺跡地図台帳』(平成8年:1996)に表示している古墳は、『嵯峨野の古墳時代』の古墳分布と同様である。ここでは、法華堂の西側に所在する古墳群を朝原山古墳群、東側を長



第3図 蓮華峯寺陵 地形図 (1/3000)



第4図 明治38年以前の蓮華寺陵 ※諸陵案出張所『陵墓地録』明治38年に所収図面を加筆・修正 (原図縮尺 1/2000)

刀坂古墳群としている。

一方、当地における発掘調査としては、当庁による昭和52年(1977)の整備工事に伴う事前調査がある(本誌第30号参照)。「陵域内には朝原山古墳群の円墳11基が存在」⁽²⁾ するため、25箇所の特レンチを設け、調査が実施された。本地西側で1箇所⁽³⁾、飛地へ号で2箇所(『嵯峨野の古墳時代』に記す朝原山古墳17号墳・18号墳)、古墳関係の遺構が検出されている。後者は横穴式石室を構成する石材である。本地西側の特レンチから中世の土師器などが出土しているが、古墳関係の遺物は確認されていない。

このように、当域の古墳についての従来の知見は、古墳の総数についてだけでも16～18基と差があったため、既述のような目的に基づき、陵域全般にわたる踏査をおこなった。

2. 蓮華峯寺陵の調査

(1) 調査方法－調査区の設定－

今回の踏査にあたっては、古墳が本地と飛地にわたり分布しているという特性を勘案し、それぞれの区域内での番号を、本－1号墳、い－1号墳、などのように命名した。また、陵墓地の近くに所在する古墳であって踏査したものについては、い外－1号墳のように称することとした(第5図)。また、既知の遺跡地図などとの対応関係については、以下のようにおこなった。

当域は、『京都市遺跡地図台帳』によれば、法華堂を中央に西を朝原山古墳群、東を長刀坂古墳群と称している。しかし、そこには古墳番号は添付されていない。また、それぞれの古墳群には陵墓地外に所在する古墳も含まれており、新たな番号を付することは混乱をまねくおそれがある。幸い、『京都市遺跡地図台帳』と『嵯峨野の古墳時代』に記された朝原山古墳群・長刀坂古墳群(『嵯峨野の古墳時代』では総称して朝原山古墳群)の古墳の分布・総数は同じであり、『嵯峨野の古墳時代』には古墳番号が添えられているので、今回はその古墳番号を踏襲し、参考に付することとした。

なお、各古墳の規模は南北長、東西長、高さを中心に表記した。厳密には発掘調査した結果をふまえ、墳丘裾を確定したうえでおこなうべきことはいまでもない。今回は、墳丘からの傾斜の大きな変換点をもって裾と認定したうえで計測した。したがって、若干の誤差を含んだ数値ということで、あらかじめご理解いただきたい。

(2) 古墳の調査(第6～9図)

① 本地

本地は東西約450mに及び、その中心に法華堂がある。確認できた古墳は法華堂の西の6基、東の1基、計7基である。

本－1号墳 本古墳は、『嵯峨野の古墳時代』には記載されていない。南北13.9m、東西9.4mを測る楕円形の古墳で、高さ約3m。南側に向かって盗掘坑があり、墳丘を東西に分断している。石材等は認められない。北側には周堀の痕跡も認められる。

本－2号墳 本古墳も『嵯峨野の古墳時代』には未記載である。南北5.8m、東西7.0m、高さ約2.5mの小規模の円墳である。墳頂部には径約1m、深さ約0.5mの盗掘坑があるが、石材等を



第5図 蓮華峯寺陵 陵域内古墳分布図 (1/3000)

確認することはできない。

本一 3 号墳(朝原山 9 号墳) 南北10.2m、東西9.6m、高さ約1.5mを測る円墳である。中央に大規模な盗掘坑を認めることができる。石材等は見当たらない。

本一 4 号墳(朝原山10号墳) 南北8.2m、東西7.9m、高さ約 1 mに復元できる低墳丘の円墳である。盗掘坑は認められないが、東側が切り通しのため、半壊している。石材等は見当たらない。

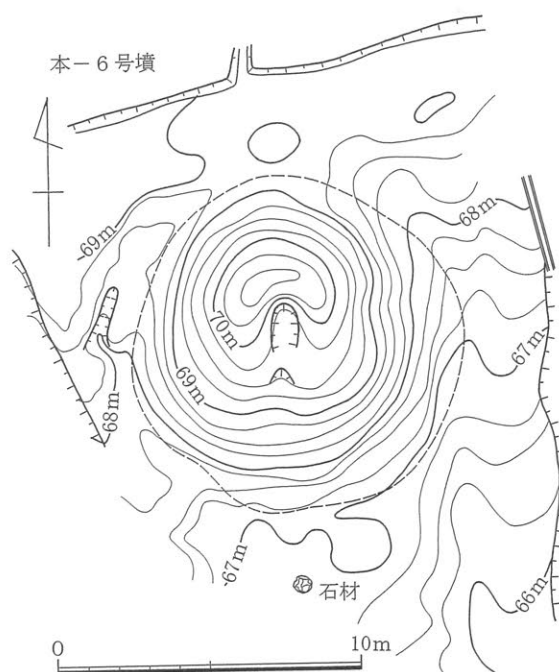
本一 5 号墳(朝原山11号墳) 南北12.3m、東西15.5mに復元できる円墳である。高さは約 3 m。本一 4 号墳と同様に東側が切り通しのため、半壊している。切り通し面には盛土の互層が明確に確認される。東裾には巨石 1 石が認められるが、原位置かどうかはわからない。

(朝原山12号墳) 『嵯峨野の古墳時代』に径12m、高さ2.3m、半壊として記載されている。その付図によれば、本一 5 号墳の北約20mのところに所在するはずであるが、現地では古墳の痕跡を見いだすことはできなかった。陵墓地形図では、該所に西から東にかけて大きく削り取られた痕跡が示されており、この部分を盗掘坑と見なしたものであろうか。

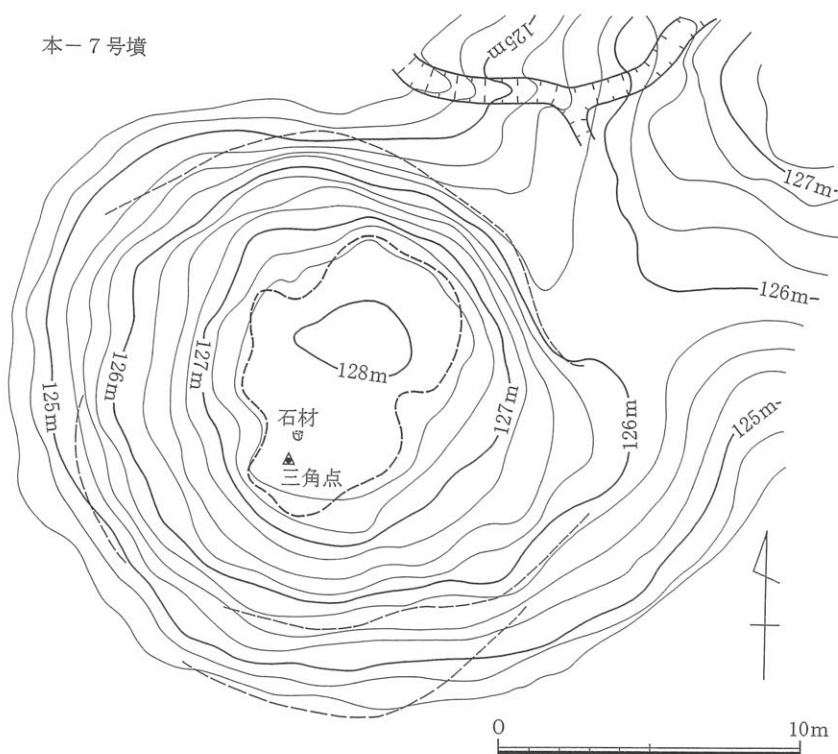
(無番) 前述の昭和52年の整備工事に伴う事前調査の際に、「古墳様の高まり」があるということで注意された部分である。この付近は境界線の北側が高さ数10cm、削り取られたような状況を示しており、結果的に若干の隆起をなしている。境界沿いに小土堤があることも注意される。今回、古墳と断定すべき積極的な証左を見いだすことはできなかった。

本一 6 号墳(朝原山13号墳)(第 6 図) 単独で位置する古墳である。周辺がほぼ平坦に近いこともあって、遠くからでも目立つ古墳となっている。径17.5m、高さ約 3 mの円墳である。北側部分をのぞき、ほぼ全周に堀をめぐらせており、とくに北西部では幅約 2 m、深さ約0.3mを測ることができる。墳丘部の保存状況は比較的良好であるが、墳頂部には盗掘坑が認められ、馬蹄形状に変形している。横穴式石室であれば、ほぼ南に開口していると推測される。その延長上には径 1 mほどの礫が露呈している。石室に使用されていた石材の可能性が高い。

本一 7 号墳(第 7 図) 法華堂東側の尾根上、標高約128mの高所に立地する古墳である。「朝原山19号墳」(『嵯峨野の古墳時代』)に対応するとも考えられなくはないが、同書付図および『京都市遺跡地図台帳』に示される位置は標高約152m地点であり、大きく異なっている。径16.0m、高さ約2.5mを測る円墳である。急傾斜をなす北側斜面は削られているものと思われるが、その他の部分で目に付くような損壊部分はない。墳頂部平坦面の南端近くに石材の一部が高さ30cmほど露出しており、埋葬施設に伴うものである可能性が高い。なお、墳頂部平坦面南端には三角点が設



第 6 図 蓮華峯寺陵域内古墳測量図 (1) (1/250)



第7図 蓮華峯寺陵 陵城内古墳測量図(2) (1/250)

置されており、当庁作成の陵墓地形図にも表示されているが、現行の国土地理院発行地形図(1/25000)には記載されていない。

② 飛地い号

飛地い号は、朝原山の山頂から南に延びる尾根上にある。標高約202m。その面積は600㎡余りである。古墳は域内に1基、その北に1基所在する。

いー1号墳(朝原山7号墳) 朝原山古墳群、長刀山古墳群のなかでは、い外ー1号墳とあわせて、もっとも高所に位置する古墳である。南北12m、東西17mと楕円形の古墳である。高さは2.5m。盗掘坑や石材等は認められない。

い外ー1号墳(朝原山8号墳) いー1号墳の北約20mに位置する古墳である。径10m、高さ約2mの円墳である。頂部には大きなくぼみがあり、横穴式石室を構成する巨石3石が露呈している。南側に開口する可能性が高い。東の裾部と思われる箇所は削り取られたような状況を呈し、地山が露呈している。

③ 飛地ろ号

本飛地は、朝原山の山頂から西南西に延びる尾根上にある。標高は約200mである。面積は280㎡余りである。その最高所に古墳が1基存在する。

ろー1号墳 『嵯峨野の古墳時代』などには未記載の古墳である。現状では高さ約1mしかなく、古墳とは認識されなかったものであろう。南北11.7m、東西14.5mの円墳である。頂部では、地表下約30cmで、石材の感触を得ることができた。

④ 飛地は号

飛地ろ号からさらに南西に延びる尾根上にある。標高約174mのところを最高所とする。3,200

m²余りの面積があり、そのなかに、3基の古墳が所在する。陵墓地に近接して、域外北側に1基の古墳がある。

は－1号墳 『嵯峨野の古墳時代』などには未記載である。南北12.4m、東西14.2mの円墳である。高さ約1m。頂部に盗掘坑があるが、石材等は認められない。

は－2号墳 飛地は号内ではもっとも規模が大きい古墳である。南北15.0m、東西17.2m、高さ約2.5mの円墳である。墳頂部に盗掘坑が認められる。西側には玄室天井石（幅1.8m、厚さ0.7m）、および転落石材（長さ2.0m、幅1.4m、厚さ1.1m）があり、そのさらに西にも巨石がある。規模から判断すると、「朝原山21号墳」（『嵯峨野の古墳時代』）に該当すると思われるが、陵域外にある、は外－1号墳がその候補となる可能性も否定できない。

は－3号墳 この古墳もは－1号墳と同じく、『嵯峨野の古墳時代』などには未記載である。南北11.1m、東西12.2mの円墳で、高さは約1.5mを測る。裾部はかなり抉られている。南側には小規模な落ち込みが認められるが、盗掘坑であるかどうかは不明である。墳丘部に石材は認められないが、離れた南側に約1m角の巨石がある。

は外－1号墳 『嵯峨野の古墳時代』などには未記載か。この付近ではもっとも規模が大きい。南北19.3m、東西19.5mとほぼ正円形の円墳である。高さは約2m。中央に石材の先端部が露呈しているが、その全体的な形状等は明らかではない。中央部からやや北に偏して径約2mのくぼみがある。陵域外に所在することもあり、「朝原山21号墳」に相当することも視野に入れておくべきであろう。

⑤ 飛地に号

飛地は号からさらに南西に延びる尾根上にある。標高約166m。約200m²余りの面積を有する。ここに古墳が2基所在し、さらに陵墓地に近接する西側に1基の古墳がある。

に－1号墳 南北12.0m、東西9.3mの円墳である。高さは約2mである。盗掘の痕跡、石材等は確認できない。規模的には、「朝原山20号墳」（『嵯峨野の古墳時代』）に近いが、確定するだけの根拠に乏しい。位置関係等からは、に外－1号墳が朝原山20号墳に相当することも否定しえない。

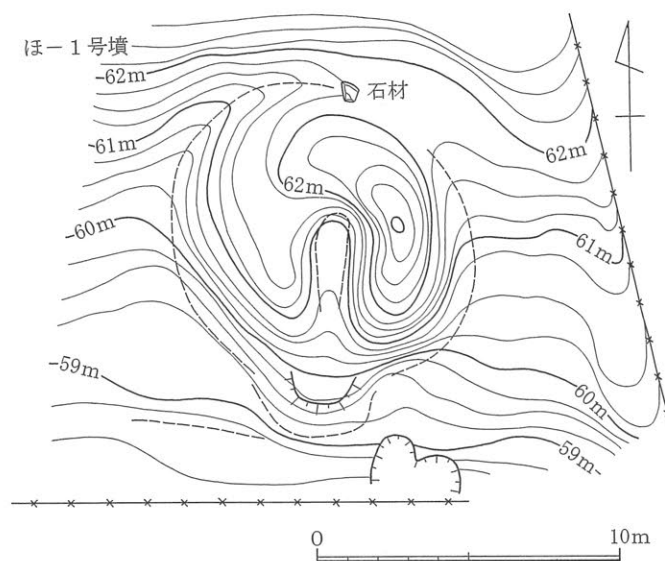
に－2号墳 『嵯峨野の古墳時代』などには未記載である。に－1号墳に近接して北側に位置する小円墳である。南北5.3m、東西6.8m、高さ1m弱である。盗掘坑は認められない。ボーリング棒探査では、墳頂部地表下約0.6mで石材の感触を得ることができた。

に外－1号墳 『嵯峨野の古墳時代』などには未記載と思われるが、朝原山20号墳の可能性も払拭できない。に－2号墳同様、規模は小さく、南北5.7m、東西6.8mの円墳である。高さ1.2m。盗掘坑や石材の露呈は認められない。

⑥ 飛地は号

飛地は号・に号の位置する尾根は、本－7号墳（朝原山19号墳）を經由して、南西へと延びている。その東には広沢池に向かって延びる別の丘陵があり、両者に挟まれた谷筋状部分に約20基の古墳が分布している。飛地は号はその西端に位置し、面積は3,200m²弱。ほとんどは竹林となっている。古墳は域内に2基、域外に1基所在する。

ほー1号墳(朝原山34号墳)(第8図) この付近に位置する古墳のなかでは、もっとも規模が大きい。径16.0m、高さ約3mを測る。中央に盗掘坑があり、その排出土と思われる高まりで、西側部が本来の墳丘高よりも高くなっていると考えられる。横穴式石室の開口部は南側と推測されるが、その裾部が舌状に張り出している。本来の墳丘の形状というよりは、盗掘の際にかき出された土砂による変形であろう。本来、周堀をめぐら



第8図 蓮華峯寺陵
陵域内古墳測量図(3) (1/250)

せていたと考えられるが、前面となる南側ではほとんど確認できない。北東部ではその幅約2mである。北裾付近に現状での長さ、幅ともに約1m、厚さ0.3m以上の石材が露呈している。横穴式石室の部材と考えられるものの、本墳に伴うものかどうかは、明らかにしがたい。

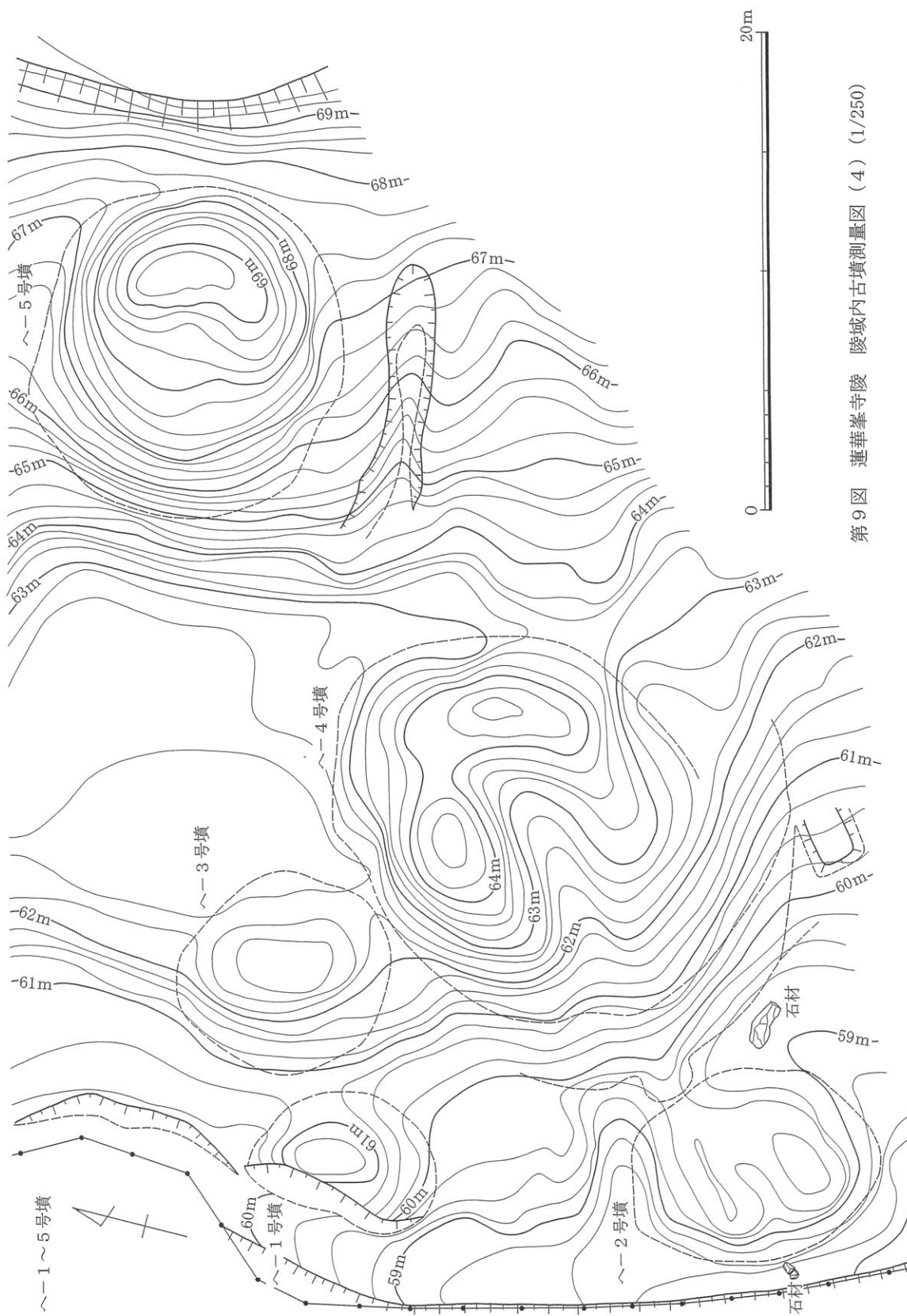
ほー2号墳(朝原山33号墳) ほー1号墳の東北約30mに位置する円墳である。南北、東西ともに長さ11.0m、高さ2.5mを測る。中央には坑があり、墳頂部は馬蹄形状に変形している。南側にも円形のくぼみが認められる。

ほー外1号墳(朝原山35号墳) ほー1号墳の東約25m、ほー2号墳の南南東約30mの造園業者の敷地内に所在する。南北径、東西径を明らかにしえるような裾部と考えられる傾斜変換点は確認できない。ただし、北東部で一部裾とおぼしき箇所をおさえることも可能であり、この点を起点に墳頂との距離を測り径を復元すれば、径約18mの円墳となる。本墳の西側は切り通し道によって半壊しており、その断面に横穴式石室の玄室を中心とした部分の側壁が露呈している。西側壁は除去され、東側壁が残存しているものと考えられる。その長さは約5.5mである。床面付近には川原石も認められ、削平は床面にも及んでいたであろう。墳丘としての高まりは顕著でないが、石室床面想定レベルより最高所までの高さは現状で約3mである。

⑦ 飛地へ号(第9図)

法華堂は朝原山から延びる丘陵に挟まれた谷筋部分の奥部に位置する。法華堂の西には6基(本ー1号～6号墳)があり、南には飛地へ号がある。飛地へ号は面積約2,400㎡を測る。当域内には5基の古墳が所在する。今回、これらの古墳すべてを実測することができた。

へー1号墳(朝原山17号墳) 飛地へ号の西隅に位置する。墳丘の西半はほぼ削り取られている。径8.0m、高さ約2mに復元できる。南東部を中心に周堀の痕跡をとどめている。昭和52年の整備工事に伴う事前調査時に横穴式石室の一部が確認されている。その時の所見によれば、基底部以外の石材はほとんど取り除かれており、大規模に損壊されたことを知ることができる。墳頂部には盗掘の痕跡等はいくつか見られるが、南北に長い平坦面を有することから、本来の形状をとどめ



第9図 蓮華峯寺陵 陵域内古墳測量図 (4) (1/250)

ている可能性は低いように思われる。

へー 2 号墳(朝原山18号墳) へー 1 号墳に近接し、その南側に所在する。南北10m、東西 8 m と楕円形の平面形を呈する。高さは約1.5mである。昭和52年の事前調査では、南西方向に開口する横穴式石室の羨道部と推測されている箇所が検出されている。この開口部分に対応するかのよう、墳頂部は馬蹄形状にくぼんでいる。石材は、この開口部分の前面に長さ0.5m、幅0.3m、厚さ0.2m以上の礫 2 石が認められた。本来は一石であったと考えられ、石室を構成していた部材の可能性が高い。また、墳丘の東側には長さ 2 m、幅 1 m、厚さ0.4m以上の礫が露呈している。この石材も石室を構成していた部材の一部と推測されるが、本墳に伴うものか、後述するへー 4 号墳に関係するものかは、決しがたい。南側、および北側には周堀の痕跡が認められる。

へー 3 号墳(朝原山15号墳) へー 1 号墳の東側に近接する。『嵯峨野の古墳時代』の古墳分布図では、朝原山15号墳と16号墳は北東、南西の関係にあるが、その位置関係は現状とは齟齬しており、両者は北西、南東の関係にある。ここでは、『嵯峨野の古墳時代』記載の古墳規模を勘案して、へー 3 号墳を朝原山15号墳に、へー 4 号墳を同16号墳に比定した。

径は南北 9 m、東西 8 m と小規模の円墳である。高さは約 2 m を測る。へー 1 号墳と同じく墳頂部が南北に長い平坦面を有しており、墳丘部をめぐる等高線も丸みを欠くことから本来の形状をかなり損ねていると見なすべきであろう。南側の一部をのぞき、周堀の痕跡も明確にしえない。墳丘南西に長さ幅ともに約0.2mの石材が露呈している。本来、かなりの大きさをなしていたと考えられ、石室を構成する石材と見なすことが可能であろう。ただし、原位置であるかどうかについては不明である。

へー 4 号墳(朝原山16号墳) へー 3 号墳の南東、へー 2 号墳の北東に位置する。墳丘そのものはかなりの改変を受けているが、径16.0m、高さ約3.5mの円墳に復元できる。へー 2 号墳と同様に、南西部に開口する横穴式石室を埋葬施設としていたと考えられ、対応するかのよう、大きくくぼみが認められ、馬蹄形状に変形している。墳頂部の東と北にある高まりは盗掘の際の排出土によって形成されたものであろう。周堀は墳丘の改変が著しいこともあり、石室開口部である南西部分では明らかにしえない。ただし、北東部や南東部では一部にその痕跡がうかがわれ、本来は南西部までめぐっていたと考えられよう。

へー 5 号墳(朝原山14号墳) へー 1 号～ 4 号墳のグループの北東に位置し、それらとは約 2 m 以上の比高差を有する。昭和52年の事前調査では墳丘北側の裾部と墳丘盛土の一部が確認されている。径13.0mの整った円墳で、高さは約 2 m を測る。墳頂部は、やや東側に偏ったところに最頂部があり、西側にはくぼみがある。盗掘の痕を示すものであろう。周堀は北東部にその痕跡をとどめている。南側には東から西にかけて傾斜する幅約 2 m の溝が認められる。墳丘と想定される部分からはわずかに離れており、古墳の周堀の可能性は少ないように思われる。墳丘およびその周辺に石材は確認できない。

まとめにかえて

今回の調査において、蓮華峯寺陵内に所在する古墳は21基を数えた。むろん、この基数はあく

までも踏査による現状観察の結果に基づくものであり、今後の発掘調査等により最終的に確認すべき必要があることはいうまでもない。『嵯峨野の古墳時代』や『京都市遺跡地図台帳』に記載されている16基に比して、5基増加したことになる。しかし、朝原山12号墳については古墳の可能性が低いことから、厳密を記すれば6基の増加となろう。陵墓地に近接する古墳についても、4基を指摘しておいたので、今回、あわせて25基の古墳についてその現状を報告することができた。

以下、それらの分布を中心に若干の補足をしつつ、まとめにかえたい。

嵯峨野周辺地域の古墳は先学によって、大きく三群に区分されている⁽⁴⁾。つまり、

- (A) 御室川の扇状地上に散在する前方後円墳群、
 - (B) 有栖川扇状地上の円墳群、
 - (C) 周辺の山裾や谷間に密集して分布する群集墳、
- がそれである。

嵯峨野における古墳の築造は、古墳時代中期以降のこととされている⁽⁵⁾。上記の(A)の前方後円墳群が該当する。これらは継続的に営まれ、後期末の蛇塚古墳で終焉を迎えている。他地域の前方後円墳群が後期にかけて急速に衰退していく動向とは逆行しており、当域の大きな特色となっている。

一方、(B)の円墳群は、発掘調査された古墳から見れば、後期後半には確実に営まれており、一部は前方後円墳築造停止以後の終末期(7世紀)の築造によるものも認められる。これらの円墳群と時期をほぼ同じくして(C)の群集墳も営建されているようである。しかし、その実態の判明するものは少なく、発掘調査がなされた事例は御堂ヶ池古墳群など数例をあげるしかない。

これらは、(A)の開始時期が先行するものの、その動向は合致する部分が多く、この付近の広大な原野を切り開き、生産力を飛躍的に増大させつつ富裕化した人々の奥津城として、位置付けることができよう。

今回、踏査をおこなった25基の古墳は、上記分類の(C)にあたることはいうまでもない。これらの古墳も、その立地により以下のように二別することが可能であろう。

(a) 朝原山の山頂から派生する丘陵上に位置する古墳。

(b) 丘陵の裾部(山麓)に営まれた古墳。

(a)は本地の1基(本-7号墳)、飛地い号~に号内の7基、およびその周辺に位置する3基、計11基の古墳が該当する。山麓や谷間に所在する(b)の古墳に比べて、総じて規模が大きいともいえるが、に-2号墳・に外-1号墳のように径が7m未満の古墳もあり、共通する属性とするには慎重であらねばならない。い外-1号墳では横穴式石室の一部が露呈しており、他にも墳丘部やその周辺に巨石が認められる古墳があることから、基本的には横穴式石室が埋葬施設として採用されていると見なして相違ないであろう。

(b)は分布上からみて、朝原山の形成する丘陵に挟まれた谷の奥部に位置する法華堂を中心に、その両脇の傾斜面に所在する群集墳と、さらに東側の谷部にある群集墳(飛地ほ号)に細別が可能である。前者には、本-1号~6号墳、へ-1号~5号墳が該当する(以下、b1群とい

う)。これらは本一1号～6号墳がほぼ同一標高上に位置するのに対し、へ一1号～5号墳では10m以上もの高低差がある。これらのなかにあつて、本一6号墳のみが単独で位置し、規模も大きいことが注目される。本墳の周囲はほぼ平坦な地形をなしており、法華堂が営まれ、一部は大覚寺関係者の墓域ともなっており、大規模な整地・造成がなされたことをうかがわせる。本来、本一6号墳の周辺にも同様な古墳が存在していた可能性を否定することはできないであろう。

一方、飛地は号付近の3基はb1群とは別の谷間に位置する。谷筋をはさんで対峙する朝原山36号～41号墳などと密接な関係を有するものと考えられる。ほ一1号墳、ほ外一1号墳はほぼ同じ標高上に位置し、ほ一2号墳のみがやや高い立地にある。

今回の踏査によって、これらの古墳の年代を明確に比定しうるような遺物の採集はできなかった。そのなかにあつて、横穴式石室の側壁の一部を露呈している、ほ外一1号墳が注目される。平面形等は明らかにしえないものの、高さ・幅ともに1mを超える巨石を使用しており、不十分ながらも当古墳群の埋葬施設の状況、ひいては年代判定のひとつの手がかりを与えてくれる数少ない資料といえよう。

以上、当古墳群の分布を中心に補足を加え、まとめにかえてみた。当地域の群集墳、ひいては古墳研究のうえで、今回の調査データがその基本資料のひとつとなれば、幸いである。

(福尾正彦・有馬 伸)

註

- (1) 『嵯峨野の古墳時代 御堂ヶ池群集墳発掘調査報告』、1971年(京都大学考古学研究会)
- (2) 『京都市遺跡地図台帳』記載の朝原山古墳群の基数とたまたま同じであるが、後に朝原山17号墳などの表記があることから『嵯峨野の古墳時代』に記す朝原山古墳群、つまり、『京都市遺跡地図台帳』の長刀坂古墳群にあたることは疑いない。
- (3) 古墳かどうか疑問である。今回の踏査では否定的な結果を得ることになった。この付近は裾部(南側)が削られている。詳細は本文を参照願いたい。
- (4) (1)に同じ
- (5) 「京都嵯峨野の遺跡一広域立会調査による遺跡調査報告」『京都市埋蔵文化財調査報告』第14冊、1997年(財団法人 京都市埋蔵文化財研究所)

付記

蓮華峯寺陵の墳丘表面調査に際しては、立命館大学文学部和田晴吾教授から多くのご教示を得た。また、同学部史学科日本史学専攻コースの森下智恵・上峯篤史(平成13年度)、井上一樹・櫻井拓馬・柏田有香・露本和也・垣内拓郎・納屋内高史・吉川宗明(平成14年度)各氏には、現地での測量に際し、ご協力を願った。記して、感謝を表します。